

「箱根駅伝から学ぶこと」

生徒の皆さん、おはようございます。校長の博田です。新型コロナウイルス感染症の影響で例年より長かった第2学期も今日、終業式を迎えました。この1年を振り返ると、誰にとっても大変な1年だったと思います。来年こそは状況が少しでも好転し、学校行事なども従来の形で実施できることを願っています。今日は皆さんに少しでも元気の出る話題をと考え、来週の土曜と日曜に行われる国民的なイベントについてお話ししたいと思います。

来週の土曜と日曜と聞いて、勤のいい人は、すぐにピンときたかもしれませんね。そう、毎年正月に行われる「東京箱根間往復大学駅伝競走」、通称「箱根駅伝」です。毎年、関東の大学の中で、前の年の大会でシード権を獲得した上位10校と予選会を勝ち抜いた10校の計20校、このほかに関東学生連合チームを加えた合計21チームが出場する大会です。1月2日（土）に千代田区大手町から神奈川県箱根町の芦ノ湖までの約110キロを各チーム5人で、翌1月3日（日）には逆コースを別の5人で襷（たすき）をつなぎながら走るといふものです。テレビで放映されているので、毎年見ている人も多いと思います。

ただ今回は新型コロナ感染防止のため、沿道での応援は控えるよう連盟から要請されていますので、例年とは異なった風景になると思います。私も毎年、テレビで観戦するのを楽しみにしていますし、数年前にはその思いが高じて、走る選手たちを直接見るためにJR茅ヶ崎駅近くの国道沿いまで応援に行ったこともあります。一人ひとりの選手たちの走りに注目するのは当然のことですが、私はテレビのアナウンサーが紹介する選手たちにまつわる様々なエピソードを聞いて、心を打たれることが多々あります。

箱根駅伝の選手になることを夢見て練習を積み重ねてきた。しかし、思うようにタイムが伸びず、もうやめてしまおうかと思った選手。また前の年に選手に選ばれたけれども、思うようなタイムが出なかったり、途中棄権をしなければならなかったりして、自信を失い、精神的にも肉体的にもどん底の状態に陥ってしまった選手のことなど、様々なエピソードが毎年紹介されます。その他にも、自分を支え、励ましてくれた家族、監督、仲間たちへの感謝の気持ちを口にしていた選手の言葉が印象に残っています。

アメリカの詩人ウォルト・ホイットマンは、詩集「草の葉」"Leaves of Grass"の中でこう言っています。「寒さに震えた者ほど、太陽の暖かさを感じる。人生の悩みをくぐった者ほど、生命の尊さを知る」と。テレビ画面の中で颯爽と走っている選手たちの多くは、日々、もがき苦しみ、精神的にも肉体的にもどん底状態を味わった人たちです。そのような時に様々な人たちからもらった励ましやアドバイスによって力を得て立ち直り、苦難を乗り越えたのです。だからこそ、走り終えた時の満足感、充実感は倍増するし、その後の自分の成長の糧とすることができるのでしょう。彼らのそうした姿が、見ている私たちに感動を与えてくれるのだと思います。実は私の広島での中学時代のクラスメイトに箱根駅伝を走った選手がいます。1985年の第61回箱根駅伝で復路優勝した日本体育大学のアンカー、10区の丸山一徳君です。中学時代から長距離走で群を抜いていた彼が、様々な苦難を乗り越えてトップで大手町のゴールテープを切った瞬間の感動は今でも忘れられません。

最後になりましたが、3年生はこれから進路実現に向けていよいよ本番を迎えます。2年生は4月から最上級学年になり、1年生は学校生活の中心的存在である2年生になります。ぜひ皆さんも苦しい時やつらい時に会ったら、先ほど紹介したホイットマンの言葉を思い出し、また箱根駅伝の選手と同じように努力を惜しまず頑張ってください。きっとその後大きな喜びがやってきます。それでは、明日からの冬休みを有意義に過ごされるよう期待して、私の話を終わります。